

国際協力の憂鬱：青年海外協力隊にみた光と影

1. グアテマラに着いて

2002年7月、私は青年海外協力隊（職種：植物学）として、中米のグアテマラ共和国に派遣された。首都のグアテマラシティに降り立ち、公用パスポートの効力を過信して意気揚々と入国審査を通過しようとしたところ、検査員に怪しまれて同期隊員16人が別室で事情聴取させられたことはいまだ記憶に新しい。日本からの公人ボランティアとして参加したつもりだったが、その情報が空港の入国審査員に伝わっていなかった。いきなり裏切られた感があったが、これがグアテマラか、と妙に納得した。

勤務地の首都で初めに目に付いたのは街の大きさだった（写真1）。街の中心部には巨大なビルが建ち並び、マクドナルドやカンペロ、バーガーキングといったファストフード店がいたるところに見受けられた（写真2）。私が日本で描いていた「インフラが未整備のグアテマラ」のイメージとは大きくかけ離れたものだった。十分に舗装された大型道路には、大型トラックやバス、自動車、自動二輪車（これらの多くが日本製）がひしめき合い、高級料理店やブティックが娯楽の場として賑わっている。「これでは日本とそんなに変わらないじゃないか。この国に何の援助が必要なんだ？」と残念な気持ちになった。

しかし一方で、よくみると肢体の不自由な人や赤子を抱いて座り込む物乞い、信号待ちの車の前でジャグリングをしてお金を稼ぐ裸足の子どもたち、手を真っ黒にしながら靴磨きをする子どもたちがあちこちにみられた。貧富の格差は確かに存在していた。この現実を目の当たりにし、少しでも貧困の改善に役立ちたいという志を再確認した。同時に、自分の無力さも痛感した。物乞いをする人たちと対峙したとき、同情心から少額のコインを分け与えていた。それしかできなかった。しかし、その行為が常にその人たちのためになるとは限らない。なかには自力で働くことができるのに、都会で物乞いをすればお金を得られることに味を占めて労働意欲を失った人もいるだろう。これは協力隊の目指す“自助努力の支援”に反している。私たちの目的は“この人たちを光に”であって、“この人たちに光を”ではない。どの人が本当に困っているかという線引きは個人の感覚による



写真1. 首都のグアテマラシティ。



写真2. ショッピングモール内のファストフード店。

ため難しいが、安易な施しによって街全体が不良化してしまうことは避けなければならない。深い洞察力をもって善意を尽くす必要があった。

2. ホームステイ先

配属先が用意するはずの家がまだ決まっていなかったため、当初は隊員連絡所に住んでいた（思えばこれが憂鬱の始まりだった・・・）。2ヶ月が過ぎてようやくホームステイ先が決まり、姉妹で同居している二人の老婆と一緒に住んだ（写真3）。文字通りの“老婆心”を強く感じることもあったが、我が子のように受け入れてもらい、心の温もりを感じた。家族との交流は努めて大切に、一緒に食事をとることでスペイン語の上達につながるるとともに、グアテマラの



写真 3. ホームステイ先の家族と。左からロリータ、筆者、エルビリータ。

昔ながらの文化や習慣に触れられたことはとても有難かった。また、会話の中から身の回りの治安情報を得られ、安全対策の面からも大変有益だった。この家は、守衛付きのゲートを通り抜け、そのなかのコロニー状に立ち並んでいる家の一角に位置するため安全面も優れていた。

この年の年越しはロリータの娘の家へ誘われた。海外に行けば誰もが経験することであるが、会話の中心はやはり「日本はどういう国だ？」というもので、私一人が全員からの質問攻めにあった。「クリスマスはどう過ごす？年越しは？」といった文化・風習的なことのほか、自動車や電子機器などの先端技術に関する質問が多かった。これらに対して、「日本の場合、クリスマスはケーキを食べるだけ。正月は酒を飲むだけ」としか答えられなかった自分が情けなく思えた。当時、日本では教育目標として「新しい時代を切り拓く心豊かでたくましい日本人」を掲げていたが、このときほど世界のなかの日本人であると痛感したことはなく、日本のなかの日本人にすぎなかった自分が、日本について何も語れないことをしきりに反省した。

この家族との暮らしにはとても満足していた。ただ一つ、家の前の道路が国際空港滑走路の4本隣だったことを除いては・・・。深夜・早朝問わず飛行機の発着が繰り返され、寝不足が続いた。さすがに耐えきれなくなり、約1年後、名残惜しくもこの家を出てアパートでの一人暮らしを始めることになる。

3. 勤務先での交際

勤務先は国立サン・カルロス大学・薬学部自然保護研修センターの中にある植物園だった。ここには博物館や自然保護担当部署などがあり、センター長をはじめ、専門家や事務担当者、庭師たちの総勢50名ほどが働いていた。

勤務先との交流活動として、2002年の仕事最終日に日本食パーティーを主催した(写真4)。日本食を食べたいという同僚たちからの強い要望もあり、お好み焼きとカレーライス、梅干、味噌汁、日本酒、緑茶を振舞った。このときは甚平に着替え、雪駄を履き、うちわを手に持って出迎えた。当日は、30人ほどの同僚たちが集まり、どこまでお世辞か分からなかったが、みんなどれもおいしいと喜び、見事に遠慮なく召し上がってくれてあっという間に完食した。日本酒も大好評だった。今まで挨拶程度しか交わさなかった仲から、一気に気兼ねなく話せる距離まで近づくことができたので本当に嬉しかった。この日は、グアテマラに来てからの一番思い出深い日となった。



写真 4. 日本食パーティー. お好み焼きとカレーライス, 日本酒でおもてなし.

赴任してからの1年間、手探りで自分の居場所を探し当て、仲間にも恵まれてすべてが順調にみえた・・・。